「白樺派」の周辺 Ⅲ

――雑誌「地上」について(二)――

今井信雄

一

『地上』が大正八年九月に、当時「白樺派」に傾倒していた信州の青年教師群の手によって創刊されたことは既に記したところである。

大正八年という時点は、『白樺』誌史の上からいっても、近代日本思想史の上から見てもまことに興味のある時期に当っている。『白樺』の創刊された明治四三年から下降して大正八年という年をながめると、対外的には『白樺』が最も華々しくきらびやかに人々の目に映った年である。この年の四月号は十周年記念号にあたり本文五四五頁、トルストイをはじめとして欧米の芸術家の写真肖像十二葉、泰西の名画二一枚のうち、フランジェリコの「受胎」、ティントレットの「ヤコブと天使」ゴッホの「花」の三葉は原色板で挿入されている。当時の雑誌としては珍らしく贅美を尽くしたこころみといえよう。

『白樺』はその発刊の当初から、「華族の坊ちゃん達が何か始めたらしい」といったふうな嘲罵の中で、ともかく十年の歳月を耐え抜いてきたのだから、同人達の誇らしさは想像するに余りあるものがある。記念号の「編集室にて」の中で武者小路は、「十年後を見よ」と創刊号に書いたその十年が巡って来たことに感慨を寄せ、長与は「十年の意義が空しかったと思う者は、よくよくの門外漢である」と記している。言葉裏にひそむ勝利者としての同人の自負を見落してはならない。記念事業は特大号の発刊のみでなく、外に演劇、音楽会劉生画展、演説会の催しも持たれた。「白樺演劇社」の発足もその一つである。一方、既にスタートしていた「公共白樺美術館」の募金状態も首尾は上々であった。志賀の手で「この月は非常な寄付金だった。これ程とは思わずにいた所に銀行の方から二百枚近い振替通告の束が二度来たので少し

驚いた」と記されている。まさに「白樺派」一門にとってはわが世の春とでもいうべき年にあたる。

しかし、今日から遡上してこの年を顧みると事情は少し変ってくる。それは最盛期ではなくむしろ爛熟褪色期に相当している。前記「編集室にて」で、武者小路と長与が「自分達はまたまた十年後を見てくれといいたいものだ」「この十周年は今後の二十周年、三十周年をいよいよ明らかに予告する」と書き続けているにもかかわらず、この年の十一・二月号は創刊以来初めての合併号となっている。創作活動も衰弱不振を極め、武者小路の「自分の師」（「幸福者」）の連載と長与の「或る人々」が時々載っている外は、若手の習作程度のものしか見当らない。どの号を開いてもかっての活力は見られず、命脈既に落日寸前といった感が深い。見方によればこの後、「白樺」の終刊になった大正十二年八月までは、閉刊の口実を求め歩んだ余喘の四年間だったともいえる。こうみれば、最盛期の証しであった筈の十周年記念号は、同時に凋落過程への再出発ともいえるのである。この間の事情を端的に数字で示しているのが「公共白樺美術館寄付金報告」である。

計画は大正六年の十月号に発表され、その巻末には既に会員数二十、口数六四と報告されている。一口は金壱円也である。会員は同人とその家族である。一般の応募者名は十二月号の第三回報告から始まり、大正九年九月号の第三十回報告がその最後になっている。これから後は、応募規定を若干改めて第二期募集と銘うっているが、会員数及び口数の累計は殆んど伸びていない。例えば、大正九年十一月号の会員数が二一名に対し、十年の三月号は三五名で、四か月間にわずか一四名増えているだけである。志賀が「この月は非常な寄付金だった」と書いた十周年記念号が、前月に比して四四四名の増加数を示しているのと較べると、そこには「白樺派」の退潮をはっきりと指摘することができる。報告はすべて府県別に分け、更にその累計を明示しているので、基金募集の状況がそのまま『白樺』の消長を物語り、併せて「信州白樺派」の動向も推察することができる。いま府県別を累計数の多いものから高位順に並び変え左表（図表Ⅰ）に示してみた。欠落の部分は手許に資料を欠いているところであるが、一部を欠いても、大体の趨勢は察知できるかと思われる。図表Ⅱは信州の応募会員の累計を棒グラフ（斜線）にしたものである。欠落の部分は推定である。

図表Ⅰ・Ⅱの何れも、大正八年四月号に視点を止めて按じていただけば、そこに『白樺』の命運をはっきりと見とることができる筈である。更にいえば、雑誌『地上』は、『白樺』の命運が定まった極限の日に誕生したことになる。

二

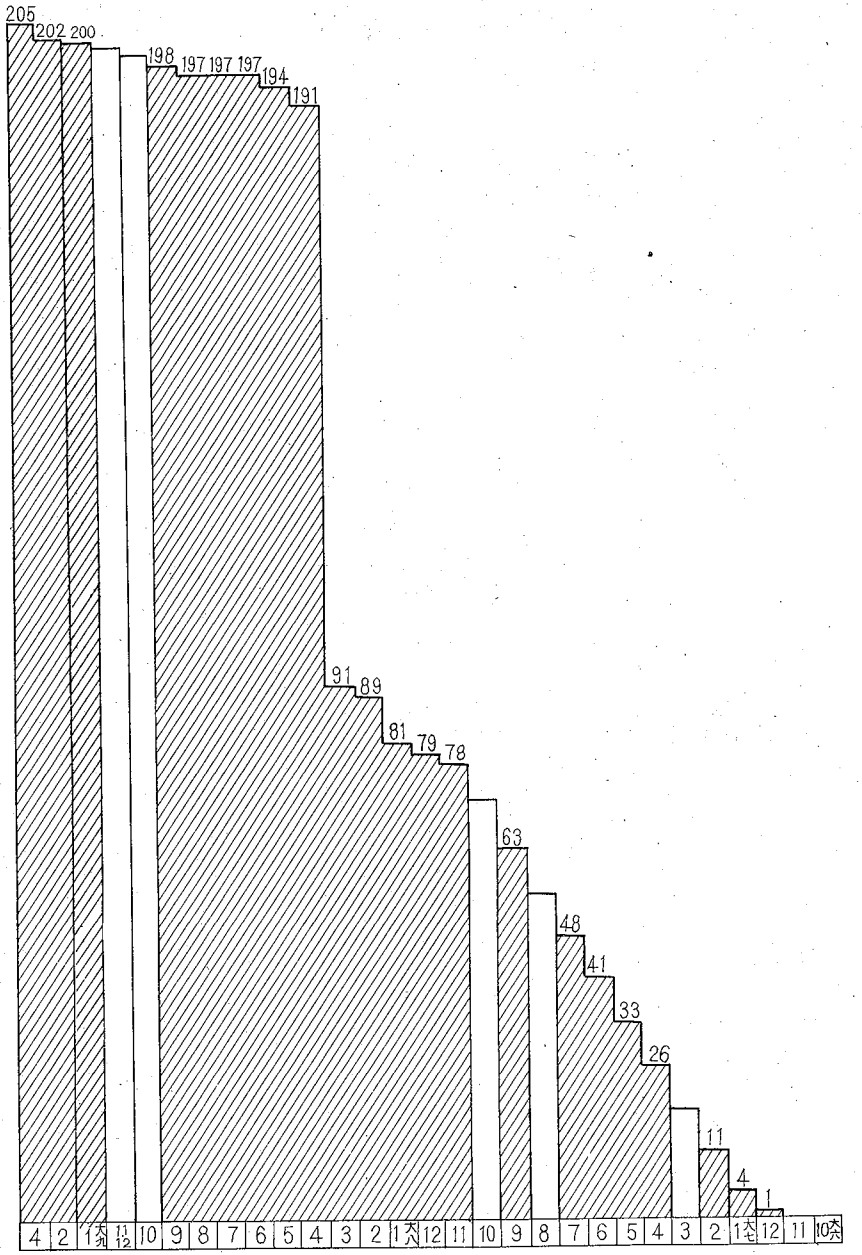
『地上』が中央の研究書誌で取扱われた最初は、昭和二五年に刊行された「日本文学講座」（河出書房）六巻に収められた「『白樺』と人道主義」（本多秋五）の一文でそれには、

白樺美術館建設基金応募者数累計表（図表Ⅰ）

年月号		報告	順位 Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ		その他	累計
大六	10	1																20
	11	2																83
	12	3	東京	61	千葉	10	神奈川	9	兵庫 大阪	7			長野	1				126
大七	1	4	東京	86	兵庫	15	大阪	12	千葉	11	神奈川	10	長野	4				179
	2	5	東京	114	兵庫	23	大阪	15	千葉	12	神奈川 長野	11			岡山	4		244
	3	6	(欠)															
	4	7	(欠)															
	5	8	東京	174	兵庫	47	長野	33	大阪	24	京都	21	千葉	14				393
	6	9	東京	186	兵庫	48	長野	41	大阪	25	京都	22	千葉	17				424
	7	10	東京	223	兵庫	58	長野	48	大阪	29	京都	24	千葉	17				489
	8	11	(欠)															
	9	12	東京	247	千葉 長野	63			大阪	32	京都	27	千葉	18				547
	10	13	(欠)															
	11	14	東京	270	長野	78	兵庫	64	大阪	32	京都	30	千葉	18				602
	12	15	東京	273	長野	79	兵庫	64	京都	33	大阪	32	千葉	18				612
大八	1	16	東京	258	長野	81	兵庫	66	京都	53	大阪	35	千葉	19			124	662
	2	17	東京	324	長野	89	兵庫	69	京都	60	大阪	41	千葉	21			136	739
	3	18	東京	344	長野	91	兵庫	71	京都	64	大阪	49	千葉	21			148	780
	4	19	東京	543	長野	191	京都	78	兵庫	77	大阪	67	千葉	24			221	1224
	5	20	東京	555	長野	194	京都	78	兵庫	77	大阪	67	千葉	25			223	1244
	6	21	東京	560	長野	197	京都	79	兵庫	77	大阪	67	千葉	25			226	1260
	7	22	東京	560	長野	197	京都	79	兵庫	77	大阪	67	千葉	25			228	1263
	8	23	東京	560	長野	197	京都	79	兵庫	77	大阪	67	千葉	25			229	1264
	9	24	東京	564	長野	198	京都	79	兵庫	77	大阪	67	千葉	25				1273
	10	25	(欠)															
11・12合併		26	(欠)															
大九	1	27	東京	572	長野	200	京都	81	兵庫	77	大阪	67	千葉	25				1291
	2	28	東京	574	長野	202	京都	81	兵庫	77	大阪	67	千葉	25				1300
	4	29	東京	582	長野	205	京都	81	兵庫	77	大阪	69	千葉	25				1315
	9	30	（精しい報告なし）															

備考　募金当初，千葉，神奈川に会員数の多いのは，同人及びその家庭が住んでいたからである。例えば我孫子に武者小路，志賀，柳，鵠沼に劉生，鎌倉に長与一家があり，一軒から何人もが加入している。

信州に於ける白樺美術館建設基金応募者数累計表（図表Ⅱ）



備考　グラフの上の数字は会員数累計，下は大正６～９年の雑誌月号を示す。

大正八年には、九月に地方の『白樺』ファンの雑誌として異彩を放った長野県の赤羽王郎、矢島麟太郎[1]、一志茂樹、小林多津衛、有賀喜左衛門の『地上』（後略）

と書かれている。次いで翌二六年、筑摩書房の「文学講座Ⅳ」に載った「人道主義の文学運動」（臼井吉見）に「『白樺』の露骨なまでの影響を見せた同人雑誌『地上』が若い小学教師によって発刊され、三年間も続いた」とある。

昭和三四年には早稲田大学の紅野敏郎が雑誌『文学』（四月号）に、綿密な調査にかかわる論究「『白樺』周辺雑誌――『不二』『大調和』など――」を掲げているが、その中に『地上』の紹介記事が見える。

（前略）『白樺』の影響をつよく受けた信州塩尻村から『地上』（大正八年九月創刊）が出た。「白樺」の広告によれば表紙はバーナード＝リーチが書き、口絵にはミレーをそえ、すべて無名の青年である。雑感の類の題名が多く、やはり白樺臭にみちている。その中心青年の一人一志茂樹が上京して『制作』[2]（大十一年四月）を出している。（後略）

三氏がそれぞれ「白樺ファンの雑誌」「露骨なまでの影響を見せた同人雑誌」「白樺臭にみちている」と指摘しているように、『地上』は『白樺』によく似せた雑誌である。表紙のバーナード＝リーチ――かって「白樺」の表紙も、リーチの手になった時期がある――からはじまり、口絵にはミレーゴッホなどを毎号掲げ（リーチの自画像も載る）、巻末は六号雑記でうめている。「白樺」の六号雑記については、筆者の内包している矛盾やその未熟さがいささかの粉飾や衒いもなく吐露され、時には思いつきや放言とも受け取れる言辞を直截に表明して、六号の方が本文よりかえって面白いとはよくいわれる評言である。また六号雑記のとっている態度については、その語り口から問題取上げの姿勢にいたるまで、互いによく似通っていることも、評者の一致した意見である。『白樺』独特のこの体臭はそのまま『地上』にも伝播している。

『白樺』の一月号は素敵だったね。カートライトの「若きミレー」はどうだ。何という有難さだ。涙がこぼれそうだ。この後を続けて載せて下さることを切に願わずにはいられない。それからストリントベルヒの「ペリカン」はどうだ。偉いものだね。前以て覚悟はしてかかったが矢張り参ってしまった。（後略）

八幡さん[3]の「仏陀の福音」がいよいよ立派な衣裳に着替えて二度目の誕生をした。百部送っていただいたのが直ぐ片付いてしまった。善い本はなるべく競争して買うがいい。（後略）

自分は豚が永遠に救われないか、それともそのまま救われているのか、それは知らない。呪っていいか、いけないかそれも知らない。ともかく永遠に無知な心霊のことを思うことはさびしいことだ。（後略）

この雑誌の使命のますます重く大きいことを痛感する。この雑誌こそはものをはっきりさせる力を持っていなければならない。今の世の中には中途半端なまがいものが実に多い。（中略）一志君の言い草ではないが「沈む奴は早く沈んでく

れ浮ぶ奴は早く浮び出ろ！」だ。いつまでもまごまごしていないで右でも左でも好きな方へさっさと歩いてくれ給え（後略）

何れも赤羽王郎、一志茂樹の手になる六号雑記であるが、何と『白樺』のそれと酷似していることであろうか。一、二の字句を改めれば、そのまま『白樺』に転載しても読者は異質な記事だとは気付くまい。標題のスタイルも『白樺』流のそれを踏襲している。青柳優のいい方を借りれば

「或る家庭」「或る若き女」「或る若き男」「或る日の夢」「或る青年の夢」「或る脚本家」または「Aと運命」「Aの幻影」というように武者小路の作品の題名には「或る××」とか「AとB」という種類のものがじつに夥しい（中略）。長与善郎の「或る人々」「彼等の運命」等の中篇、椿貞雄の「或る家の出来事」小泉鉄の「ある少女」尾崎喜八の「ある女の死」近藤経一の「ある秋の夢」等。武者小路の「或る男」有島武郎の「或る女のグリンプス」以来、連綿として「或る××」の題名が続いている。このような題名は、一面白樺派の文学の特色を象徴しているようである。（昭和十八年刊「大正文学作家論」所収「白樺派文学論」）

『地上』の選題にもこうした傾向が見える。わずか十二冊の雑誌の中に「或る農夫」「或る夜の夢」「或る日の事」「或る朝の事」「或る刀鍛冶の話」「或る夜の祈り」「Cの死」「AとB」「AとA′」といった類の標題が頻出している。紅野のいう「雑感」の類も数多く並べられている。瑣末な類似点まであげたてれば、泰西名画複製画の頒布、「白樺美術館」や「白樺演劇社」の基金募集にならった「私立学校建設基金募集」公募の段取りなど、その着想・方途の一切が類似の体裁を装っている。また巻末には『白樺』『新しき村』『TOMODACHI』（『友達』）『詩』等の『白樺』衞星誌、白樺社出版の「セザンヌ、ゴッホ画集」、山岳堂の「西洋名画複製品」の広告まで掲載されて、『白樺』を見ているような錯覚に陥ち入る。つまりすべてが、「露骨なまでの影響」「白樺臭でみちている」ことになる訳である。

三

『地上』と『白樺』の類似点は、外見上の問題のみでなくその内容についてもいい得ることである。

バン、ゴォホよ、
燃えるが如き意力もつ汝よ。
汝を想ふ毎に、
我に力わく。
高きにのぼらんとする力わく、
ゆきつくす処までゆく力わく。
ああ、
ゆきつくす処までゆく力わく。

（『白樺』武者小路実篤―原文のまま）

ミレーは俺の喜びだ。喜びの源だ。
そして自分をむち打ってくれる慈愛に満ちた父だ。

寂しい時のかくれやでもある。
俺は寂しい時ミレーを思う。
自然に満たされた時もミレーを思う。
ミレーの言葉の前には言葉がない。
（『地上』小林多津衛）

天才を讃歌讃仰し、芸術家及び芸術に熱愛を傾注している態度も『地上』は『白樺』をなぞって相似形を描いている。『地上に』頻出する芸術家を順序不同に並べたてれば、ブレーク、ホイットマン、トルストイ、ドストイェフスキー、ロマン＝ローラン、ジッツトー、アンジェリコ、マンテーニャレオナルド＝ダ＝ヴィンチ、レンブラント、ティントレットグレコ、ドラクロア、ミレー、セザンヌ、ゴッホ、シャバンヌ、ロダン、ベートヴェン、ベルリオーズ等々である。

『白樺』も『地上』も同人間が異様な熱っぽさをもって結ばれているが、その熱っぽさは芸術が媒介している。紅野敏郎は「白樺同人」の交流を説明するのに「友達耽溺」ということばを使っていたが、「友達耽溺」の紐帯になったものは、共に絵画を語り音楽を聞く感激であった。芸術はそれを享受するに相応しい、感性豊かな年令期を必要とするが、『白樺』『地上』を生んだ人々の年令[14]は略々重なってくる。何れも二五才前後の青年であった。

さてミレーを讃えた小林は、「寂しい時」の対極として「自然に満たされた時」を置いているが、満たされる内容が「自然」である点に注目したい。

『白樺』の人々が一部の芸術家に深い帰依を示したのは、その芸術家が自己の芸術に自己の才能を十二分に生かし得たと認めたからである。この場合芸術作品は「自己を生かす」ことの結実を意味していた。つまり芸術愛好とは、「自己を生かしきろう」とするところから出発しているのである。ここで問題は「自己とは何か」という命題に移行するのであるが、武者小路は「自己」を生んだ根元は「自然の意志」だという。この世に存在するもの一切が「自然の意志」で生み出されたものであるように、「人類」も人類の中の各個人も等しく「自然の意志」の所産であると説明する。自分を自分らしく生きれば生きる程、それは人類として生まれてきた責任を果すことであり、「自然の意志」にかなうことである。だから、「生まれた以上は」

自己を生かしぬけ
自己のうちにいる、人類と
自然を生かしぬけ！（武者小路実篤）

ということになるわけである。小林が「満たされた」と思う世界は、この「自然の意志」に副うた、少くとも副うたと思われる一瞬だったのであろう。

「自然」が「自己を生かす」根元であり、「生命」の源泉であるとする考えは、時には「自然」を「大地」ということばに置き替えて、雑誌『地上』ではしばしば使用されている。その図式をはっきりした形で示したものの一つに一志茂樹の評伝「アゥギュスト＝ロダン」がある。

限りなく吾々のうちに愛をよびさまし、神の意志を告げている自然の美は、まことにこの世のもっとも光栄であり、いのちの歓喜である。（中略）

彼は自然の意志に服従して、すこしでもそれに命令しようと考えなかった。むしろ、自分の意志が自然の意志に忠実でないことに絶えない苦悩の生活を続けた。（中略）

彼は自然に一切の美の泉の流れいづる源を見、それが唯一の創造者であることを知った。（『地上』二年二号）

人体にやどる美、如何なる人間の生活の奥底をも流れる生命、それ等は大地に連なるというよりも、むしろ大地そのものである。（『地上』一年二号）

自己の存在も生命も「自然の意志」であり、「人類の意志」であるとすれば、『白樺』がそうであった如く、『地上』もまた「自己を生かす」事に問題は集中してゆく。「本当の仕事をする」には、「人間に与えられた本能を各々が充分に生かし切る事だ」（『地上』一年二号、赤羽王郎）、「お前の使命は、お前を生かすことだ。それは大変なことだが、生かすか生かさないかによってお前の人生の深浅は決まるのだ」（『地上』一年三号、小林多津衛）「AとA′」という作品に登場する人物の対話である。赤羽や小林のいう「自己を生かす」ためのエネルギー源――一志のことばを借りれば「いのちの歓喜」――は「愛」と「美」である。そうすれば『地上』に人間愛と芸術讃揚が語られるのは当然ということになる。それがまた『地上』をして、『白樺』の複線乃至複々線としての性格を構成することになる。

四

『地上』の性格を説明するのに相応しい作品は前記一志茂樹の評伝「アゥギュスト＝ロダン[5]」（八回連載未完）、田中嘉忠[6]の創作「夜明けて朝は輝き出でん」（五回連載、後『創作』に三回連載、未完）、バーナード＝リーチの「回顧より」[7]（二年四号所載）に言及すべきであるが、紙幅の関係で次の詩篇をもってそれに代えることとする。

生きようではないか

私は今外を見た。
ガラス戸を透して荒れ狂う雪が大空に満ちている。
おお来い来い。古きに向っての破壊よ。
『改造』『解放』と何をかいう。
なまぬるき哉日本、
死したる日本よ。
私達は何を為すべきか。
生きよ、死から生きよ。
死の牢獄を破壊しよう、
躊躇なく。
「私はウォルトホイットマンだ」、
ホイットマンはそう叫んだ。
強い叫びではないか、
ホイットマンはかく叫びつつ進んで行った。

ホイットマンには生命がある、
ホイットマシは生きている、
ホイットマンの前にあらゆる伝習は閉息した、
ホイットマンによって虚偽はたたき破られた。
肉は霊と共に歓喜の声を挙げた。
霊は肉と共に真黒な硬化から甦った。
そこに生命は死を払い落して偉大な力を生み出して来た。
私達は生きようではないか。
生活を確立しようではないか。
新らしい日本を生きようではないか。
私達は日本人だ。
日本を生かすものは私達より外に誰があろう。
ロシヤ人ではないアメリカ人でもない。
ロシヤ人はロシヤを生かせ。
アメリカ人はアメリカを生かせ。
黒奴はアフリカを生かせ。
人間は人類を生かせ。
天才は私達の生命の糧だ。
なまぬるい生活は安固のように見える。
古いのりの上に生活しているのは安全の様だ。
そんなに見えるのは生きていない証拠だ。
生きているものは死を恐れるがために何もしないということはない。
そんな懸念があっては何も出来ない
生命力は何も恐れはしない。
生命の進行はあらゆる美の最上なるものだ。
芸術は生命の進行の上に生まれる。
だから尊い。(『地上』創刊号)

二二才の青年、有賀喜左衛門(農村社会学専攻、現在日本女子大学々長)の詩である。

『白樺』説明の図式を
自己(生命・人類)を生かす→芸術→天才

というふうに展開させれば、この一篇の詩は右の図式をよく解明し得ていることになる。詩の中で当時(大正八年)の世界的思潮を反映してか、日本を生かすのは日本人の外誰もいないと同様、ロシヤ・アメリカ・黒奴を生かすのもそれらの国々の人をおいては誰もいないことを主張して、それぞれの民族の個性の顕現を要望している。しかしつまるところ、各民族が生きるということは人類の生きることを意味するといっている。ただ「生命」「人類」「天才」「芸術」に生きようとすることは、古きに向っての破壊が必要であり、「なまぬるき」「死したる」日本――「死の牢獄」からの脱出を意味すると説いている。では、「古きに向って破壊」しようとするものは何であろうか。それは『改造』でも『解放』でなくわれわれの生命力がそれを仕遂げるというのである。芸術や天才が尊いのは、それらが「生命進行」の具象だからだと付言している。

いうまでもなく『改造』は大正八年四月、山本実彦の改造社から、『解放』は同年六月、吉野作造・滝田樗陰ら「黎明会」同人の手になった雑誌で、何れも大正デモクラシー推進のための役割を果した。なお『改造』は翌年から、堺利彦、大杉栄、賀川豊彦、室伏高信、猪俣津南雄、河上肇を常時執筆者として社会主義の傾向に旋回している。私はさきに『地上』発刊の大正八年という時点は『白樺』誌史の上からも、近代日本思想史の上からもまことに興味ある時期に当っていると述べたが、この年は大正六・七年を含めて近代思想史上その思想振幅のもっとも激しかった一時期といえよう。

大正六年一月には「余はトルストイの思想の浸潤普及をいかに見る乎」(安部磯雄)、二月に例の「怒れるトルストイ」(広津和郎)、八月は「トルストイと日本の人道主義者」(石坂養平)、『科学と文芸』には加藤一夫が「トルストイは革命運動をどう見たか」を書いている。以上は何れも雑誌論文だが、刊行物には堺利彦の「社会主義者の杜翁観」がある。まさに世を挙げての「杜翁時代」である。河上肇「貧乏物語」西田幾多郎「自覚における直観と反省」、大杉栄の『文明批評』創刊もこの年にあたり、十月にはソ連の社会主義革命が行われている。

翌七年になると途端に、思想界を席捲していたトルストイ旋風は閉熄し、河上肇、水谷長三郎の「友愛会」、学生の「労学会」、吉野作造、麻生久らの「黎明会」、東大学生赤松克麿宮崎龍介らの「新人会」が結成された。『労働と文芸』『民衆の芸術』も創刊されて俄かに社会主義・労働運動の機運が高まっている。米騒動の起ったのはこの年の八月である。

九月二三日武者小路実篤は、「新らしき村」の仕事を始めるため同志と共に日向に向った。途中、浜松・信州・京都・神戸で熱気の溢れた講演会を開いている。長野(二八日)、松本(二九日)の講演「新しき村について」が行われたことは「『白樺派』の周辺Ⅰ・Ⅱ」に記述したところである。『村』が発足すると直ちに堺利彦の「新しき村の批評」(中央公論)山川均の「新しき村」(新社会)など部外者からの批判が集まり、白樺派内部においても有島武郎の「武者小路兄へ」(『中央公論』七月号)が出て世間の注目を浴びた。現代教育の基礎理論を確立したジョン=デューイの来日は一二月であった。まことに目まぐるしい思潮の興亡である。

赤羽王郎をして「世の中の変りようは随分ひどいものだ。つい此の間までデモクラシーを問題にして物騒がっていたのに、もう労働問題まで一足とびをしている。(後略)」(『地上』一年三号)と詠嘆させている事情もよくうなずける。あしかけ三年の歴史しか持たない『地上』にも、こうした社会思潮激動期の痕跡は認められる。トルストイ主義はもとよりとして、キリスト教の信仰・人道主義・理想主義・社会主義などの諸潮流が未分化の状態で渦巻いていた。

「生きようではないか」の中で、ホイットマンを讃え、「『改造』『解放』と何をかいう」と詛った有賀は、それから一・二か月後に当る日の思い出を次のように回顧している。

あの頃私は一生懸命になってクロボトキンを読み始めた。それはクロボトキンの自叙伝であった。私はクロボトキンから種々訓えられた、この世の悲しい出来事や美しい事を。私は実際どれくらい昂奮したことか。

私の胸をやいたものは虐げられた個性、虐げられた人間、虐げられた民族であった。自分自身に対して確実に戦を開始したのもその時だった。そうして不正義な国家に対して戦いを開始したのもその時だった。私は自分の虚偽を憎むと同じ程に日本のなして来た虚偽と不正を憎んだ。

私はある企てをもくろんでいた。それは可成根強く私の心を占めていた。私は朝鮮のことをしばしば考えていた。私はこの考えを誰にも秘めていた。私は全身の熱情を持って考えた。私は朝鮮へ行こうと考えた。革命のためではなかった。私は鍬で赤く枯れた土地に青い穀物を実らせようと考えたのだ。(『地上』二年七号)

周囲の事情で右の希望が適えられなかった有賀は、次に百姓になろうとしている。それは「今住むこの土地で美しい種を実らせようと思ったから」であった。クロボントキンに訓えられて昂奮はしたが、その感銘は革命路線につながる性質のものではなく、「赤く枯れた土地に青い穀物を実らせ」「今住むこの土地で美しい種を実らせよう」がためのクロボトキンであった。クロボトキンを読み、その影響がなみなみでなかったことは、その時期を生きた青年の共通現象であろうが「青い穀物」「美しい種」を実らせることは、有賀独自の世界であり、『白樺』の理想としたところである。『地上』の誌名は「地上に天国を!」の願いから生まれたものだが、「美しい種」を「この土地」に実らせようとする有賀の希求は、そのまま『地上』の精神につながってゆく。

五

さきに文芸研究諸家が、『地上』は『白樺』の模倣であると指摘した所論には私も同感で、今までの縷述は両者類似の例証列記の観さえある。いや、『地上』発刊の当初すでに信州においても、『地上』は『白樺』の猿真似であるといった批評は出ていたようである。「『地上』の連中は、武者小路が信州にあらわれると、そのインヴァネスの裾を捧持して畏れかしこみてつき従っている」といったかげ口もささやかれていた。同人も周囲のこの空気は察知していた。『地上』創刊号に「雑感」—路上で—と題して一志茂樹は一先輩の苦言として「近頃の若い者は足がまるで地から離れ、何かにかぶれている。厭なにおいを持っている。意気地がないから人の真似ばかりしている。全くよくない傾向だ」「もっとはっきりいえば『白樺』くさいのだ。『白樺』がどうというわけではないが、若いもののかつぐにおいがいやだ。たまらなくきざだ。言葉まで真似しないたっていいような気がする。本当に分っているか疑問だ」と語らせている。

同じく六号には小林多津衛が次のように書いている。

私達をある者の模倣者、自分を持っていないものの空想家

と思う人達よ。パリサイ人よ、君の理屈は自分達をこばんでも、自分達の中に燃えるこの憧憬と喜びをどうするのだ。自分達を軽蔑する者は自分達を羨む者だ。憎む者も又。（後略）

「模倣」とは一体何をいうのだろうか。「生きようではないか」の中に見られる有賀の気慨は、単純に「模倣」といいきってしまえないものがある。小林のいう「自分達の中に燃えるこの憧憬と喜びをどうするのだ」といった感懐は、「露骨なまでの影響」といって済ませていられないものがある。もし小林・有賀を含めた『地上』同人の揚言が、その場限りのあだ花として終ったならば、なるほどそれは「露骨なまでの影響」に過ぎなかったであろう。しかし彼等の内に燃えていた生命力は、模倣の枠を越えて外に溢れ出たように思われる。その溢れ出た水路は教育界という畑に滲透し、拡がっていったのである。時には毛細管のような管を通して、末端にいたるまで灌漑作用を施したのである。『地上』が発売から三日にして千部売りつくしたことは前に記したが、そのわけは学童・生徒をとおして各家庭にくばられたからである。思いもかけぬ山家の炉辺に、ミレー、ゴッホ、セザンヌが散っていったのである。ちなみに、『白樺』の創刊号は千部に満ちていない。（武者小路説、八百。里見弴説、三百。）

『地上』に熱情を注いだ青年教師の殆んどは、現在七十才を過ぎている。その大部分が学校長・教育長・支部教育会長の職歴を持った人々である。しかしそのことは、教育行政にたけていたことではない。現に赤羽王郎など「古きに向っての破壊」をこころみ、幾度か周囲との軋轢で自ら職場を捨てたり、また追われたりしている。一旦職場を去っても教育への情熱にかられて、圧迫と迫害の隘路の中から教壇へ復帰するのが常であった。時には周囲からの期待と要請に応えての復帰もあった。七四・五才にして都下日野市の教育長に招かれて指導主事に就任したのは後者のケースである。昭和三九年十一月二二日号の『朝日ジャーナル』に、「硬骨」（素顔二〇三）と題して赤羽が登場している。その中で彼は現代教育を「人間性喪失」「創造性のない人つくり」と評している。赤羽については「白樺教育に生きた人々」（後出）で触れるが、同じことは他の何人かの人々についてもいえることである。

一九六七年四月の稿になる小林多津衛の「民芸と世界平和」という一文がある。その中に小林は、ある朝ふと胸中に去来した思いを長詩に托して挿入している。

（前略）
人間が他の人間の上に爆弾をおとす
そんなことが
平気でできる人間がいていいものか
生きようと切な願いをもつ人々
こんな願いにかこまれて
生きようとする自分

自己を生かし
他を生かす

人間の悲願のすべては
そこにかかっているのではないのか（略）

隣人愛・人類愛を説き願うすべての教育者は
何をしているのだろう（略）

「人間の業の深さ」などといって
良心をごまかし
何もせず
傍観してよいものなのか
世界の科学者・教育者
すべての人々が手をつなぎ
力をあわせる時が来ているのではないのか

二三才の小林がかって「お前の使命は、お前を生かすことだ。それは大変なことだが、生かすか生かさないかによってお前の人生の深浅は決まるのだ」と語っていたことを想起していただきたい。その小林が七十才を超えた今日、人間の悲願は「自己を生かし　他を生かす」ことであって、人生はお互い同志「生きようと切な願いをもつ」ものだといっている。一方、「隣人愛」「人類愛」を説いて「すべての人々が手をつなぎ、力をあわせる時」を強調している。大正八年の昔彼等を「模倣者」と呼んだ周囲に対して「パリサイ人よ、君の理屈は自分達をこばんでも、自分達の中に燃えているこの憧憬と喜びをどうするのだ」と報いたが、その「憧憬と喜び」を、教育者としては地方人に、教育会長としては後輩の教師達に生かしつつ、同時に自分も生きて今日を迎えたのである。

小林の使った標題「民芸と世界平和」の「民芸」は、もちろん柳宗悦の「民芸」である。私がかって訊ねたことのある小林の郷里佐久の望月は、冬の日の為か、一日に人影何人かを見るにすぎないような寒村であったが、邸の一隅には、東京駒場民芸館にならった立派な蔵に、彼の蒐集になる民芸品が陳列されていた。宗悦が好んで引用した詩句を引いて、小林の人生観を語ってくれた。

本来無東西
何処有南北
迷故三界城
悟故十方空

辞去する時に贈られた土産は、「私達の自我の各々は　神の国の部分部分につけられた名前である」（ロマン＝ロラン）と和紙を紫紺に染め、白い文字を浮きたたせた小林手製の作品であった。

「白樺教育」を信奉した青年教師が今日をどう生きているかを示す事例をもう一つだけ記そう。頃日、雪祭りで名高い下伊那郡阿南町新野で、学生村の草分けをした坂井陸海[8]の書簡に接した。

（前略）

私は『地上』の人々から一方ならぬ恩恵と影響を受けました。その「白樺教育」に、できる限り徹しようとして今日まで努力して来ました。（略）武者小路先生をはじめ『白樺』の先生方何人かには再三お目にかかっています。松本の宿舎で何のはずみか「ひたい押し」という遊びを始め、隅の方に小さくなっていた私に岸田（劉生）先生が「君来たまえ」と名指しで、先生のひたいと私のひたいとをぶちつけて真赤になって押しくらべをした思い出もあります。柳（宗悦）先生のお伴をして飯田町の古着屋を歩いた事も思い出します。ただ今、新野高原の涼しい夏を私どもの子供や孫が日頃厄介になっている都会の、学生諸君のために解放して夏期学生村を開いています。武者小路先生から、先生の好きなお言葉「和而不同」の文字を、私の教え子の好意から学生村のために書いていただき、それを学生村の指針としています。田舎が都会にしてあげられることの一つは「この涼しい気候と信州の風物」です。学生は旅人ではなく、三十日以上[9]の生活者としてここに生活してくれますので、必ず思いもよらない強い人生観を育ててくれるものと信じています。（後略）

新野高原夏期学生村の発端は、老後の生活を豊かに送るための睦会（むつみ）（老人の集い）の事業の一つとして生れたもので、坂井の手になる「学生村誕生の日誌的記録」からその意図を探ると「新野がかって生産に力を注いだ結果、村の生活が豊かになった反面、『獲る』という行為が人間の精神を貧弱にして生活を利己的なものにする傾向がある。これはわれわれ老人にも大きな責任のある事である。われわれは死にがけにこの誤りを少しでも正しい姿に戻したい。それには得る事の反対である『与える』ことの喜びを持つ必要がある。この喜びを学生村で実現してみよう。そのためには素朴な愛情——与えれば与えるほどふえるもの、奉仕——自分も愉しんで他人を喜ばせる——の二つを持ち合わせれば、われわれの希望は可能であろう」というところにあった。また坂井の規定する学生村の、あるべき性格の中で目につくのは次の二か条である。

I、学生村は、県の観光課が力を入れ始めたので、観光運動のように思われがちだが、如上の意味からいってそれは文化運動である。

II、新野は「雪祭り」「盆踊り」が無形文化財に指定されているが、「学生村」もある時期が来れば新野の文化財として保存されるべき性格を持っている。

坂井は「白樺教育」にできるだけ徹しようと努め「自分を生かし、他人を生かす」意義を「学生村」育成の仕事の中に見出だそうとしているのである。昭和三七年十一月には部落ぐるみ、坂井の仕事に協力し、総工費九百万円の「新野学生会館」が建設された。

往年の「白樺運動」の精神を今日に生かした人々は、前記赤羽王郎、小林多津衛の外、今井久雄、一志茂樹、有賀喜左衛門、それに近年他界した人々などに言及すべきであるが今

は割愛する。

六

武者小路はかって「若い人の作品は大概誰かの模倣のように思われる。しかしそういうことは一概に責むべきものではない。それはただある所にゆく為に通らなければならない道を歩いているのにすぎないかも知れないから」（『白樺』六号感想――大正二年三月号）「僕の真似をする人があるという。その人は駄目な人だということはわかり切っている。しかし知らずについ真似る人がある、内から滋養分をとったために似てくる人がある。そういう人はまだ自己が滲み出す時がないので外見から模倣しているように思われやすい。しかしそういう人はあるキッカケからいつのまにか独立してしまう。それは鶏にかえされた家鴨のようなものだ。生長力のよわい人はともかく、生長力の強い人は先輩に似ることは恐れる必要はない。それを貫けばいい。あともどりしてはいけない。」（『白樺』六号雑記――大正六年五月）

武者小路のいうように、『地上』同人の多くは「ある所にゆく為に通らなければならない道」を通った人々であり、「生命力が強い」が故に「内から滋養分」をとって、一つのものを貫き徹して後戻りしなかった人々であった。

武者小路の文学は、何十年来同じことを絶えず繰返している。しかし、いつも清新である。その秘密は武者小路文学の源泉性にあるのだとはよく聞くことばである。

泉の嘆き

はき出せども、はき出せども
はき切れず、はき切れず
かく泉嘆く
はき切れぬ内は

（武者小路実篤）

「教育」の実態を説明するには、この武者小路文学の持つ源泉性を借りてくれば案外うまく説明がつく。第一教育の対象である学童・生徒は人類の、民族の「はき切れず〳〵」生まれてくる泉である。そして子供の内包する可能性は、これまた「はき出せども、はき出せども」はき切れる筈のものではなく、反対に教師はひき出せども引き出せども、子供の内なる生命力を引き出し切れるものではない。そこに教師の持つ「泉の嘆き」があり、永遠の営みが課せられるようである。『白樺』や武者小路が信州の教育者に、『地上』に迎え入れられた所以はここにある。

私が拙稿を草するにあたって、「模倣」なることばを「亜流」ということばに置き換えられなかった訳は、この教育者達の持っている源泉性を感知していたからであった。こう考えてくると、さきにあげた小林や有賀の詩は「模倣」としての詩でなく「自己が滲み出す時」の、「独立」せんがための詩であったことに気付く。今日的の時点に立っての効果測定をすれば『地上』の仲間は、錯綜混迷する大正期の思潮の渦中にありながら、自己の立脚点を『白樺』に見出していたので

ある。『白樺』の命運の定まった極限の日が大正八年であり、その日が『地上』開花の日であったことは既述したところであるが、右の考察がそれを実証している。『白樺』と『地上』とを並べて書きたてることは、その規模・内容・業績の何れの面からみても問題にならない。一方は文学史上に赫々たる足跡を遺し、一方は無名な地方誌にすぎない。片や文芸雑誌片や教育雑誌である。比較すること自身ナンセンスである。しいて両誌発生当時の類似点をあげれば、何れも思想的動乱期に、自然の意志にそうて自己を生かそうとしたこと、第二に日を追うに従って熱情的なうねりにまで高まっていった事情が何れも芸術を媒介にしている点などである。『白樺』誕生の明治四三年は啄木が「時代閉塞の現状」を書き、また大逆事件の起った年でもある。中央と地方との違いはあっても「古きに向っての破壊」を試みる青年達の心情には共通したものがみられる。奇異な比喩ではあるけれども、木曽馬籠の「夜明け前」が、日本の表玄関の「夜明け前」と相通じているようなものである。

『白樺』と『地上』発刊時の開きは十年であるが、『白樺』という本木は飛花落梅、思わぬところで『地上』という花を咲かせたことになる。本木に較べれば『地上』は脆弱な末木かせいぜいひこばえ程度の存在でしかあり得ないが、ひこばえは教育という形に姿を変えて『白樺』の流れを今日に伝えている。「白樺派の周辺Ⅰ」で私は「いまさらながら、これが文学運動というものだな」という平野謙のことをば引用したが、再びここでこのことばを繰返したく思う。『白樺』は大正中期でその果すべき役割は終ったと冒頭で述べたが、『白樺』などの預り知らなかった『地上』にその命脈は引き継がれ、更にそれが大正の自由主義教育に参加していることに想いをいたすと、「白樺派」の寿命はまだまだ終ってはいないことになり、いまさら『白樺』の存在の大きさについて再認識せざるを得ない。たんぽぽの冠毛は風に四散して、思わぬところで見事な花を咲かせるものである。

註1、矢島麟太郎は『地上』の有力なシンパであり執筆もしているが直接発刊にな間係なし。後、『地上』の芸術主義に懐疑を抱いたのであろうか、この仲間と袂を分つ。クリスチャン。

2、『創作』のミスプリント。『創作』大正一一年四月～十一年八月、計一六冊。九月号は全部焼ける。初期の表紙・裏絵共に岸田劉生筆。

3、八幡関太郎『白樺』の寄稿者。

4、『白樺』『地上』発刊時における同人及び本稿に登場する『地上』シンパの年令表。

地上(大・8)	年令	白樺(明43)
赤羽　王郎 ○矢島麟太郎	33	
	32	有島　武郎
	31	
今井　久雄	30	
笠井　三郎	29	正親町公和
△○中村亮平	28	有島　生馬
○小川　久喜	27	志賀　直哉
○一志　茂樹 ○田中　嘉忠 △○坂井陸海	26	
	25	武者小路実篤
○高津　作吉	24	木下　利玄
中谷　勲 ○小林多津衛 ○池田　忠	23	児島喜久雄
有賀喜左衛門	22	×長与　善郎 里見　弴
	21	柳　宗悦 ×岸田　劉生
○一志　斐雄	20	郡　虎彦 (菅野二十一)
○印推定年令 △印直接「地上」と関係なし。	備考	×印後から加入

5、『地上』発刊以前から着手していた研究。高村光太郎が関心を持って読んでいた記事。当時海外で出版されていたロダンに関する研究文献は殆んど一志の手で蒐集されている。

6、大正四年長野師範学校卒、付属小学校訓導を経て、学校長歴任。クリスチャン。

7、かってバーナード＝リーチが帰国しようとして果さなかった日の原稿を、大正九年帰国実現を見た日に『地上』に掲載。

8、大正四年長野師範卒。学生村の創始者として話題になった人物。

9、三十日以上滞在が条件（現在は二週間か）。短期の滞在では人間として触れ会いが出来ないという考えからである。入村時には受け付けで、老人達の手になる高原植物の押葉はがきに、入村したことを家元に通告させる。それが入村許可の条件となっている。